# 島根の民話

第五四回

## エンコウ婿・浜田市三隅町鹿子谷

令和3年8月17日掲載

収録・解説・酒井　董美（ただよし）　イラスト・福本　隆男

語り手　山川テルさん（明治25年生まれ）
収録・昭和35年1月31日

### あらすじ

昔、おじいさんとおばあさんと娘が三人おりました。

おじいさんが田の水を見に行けば、水の道をはずしてあります。

元のように水を当てておけば、エンコウ（河童のこと）が後からやって来てそれをはずします。おじいさんはエンコウに、「家に娘が三人おるけえ、どれでも一人やるけえ、水をはずしてくれんなや」と言うと、

「娘をもらわれりゃ、はずしやあせん。娘をくれえ」と答えました。

明くる朝、おじいさんが、いくら経っても起きません。一番上の娘の方がやって来ました。「お父さん、起きてご飯を食べんさい」「ご飯を食べようがのう、おまえ、エンコウの嫁さんに行ってくれんかい」。おじいさんは頼みました。「だれがエンコウの嫁やなんかに行こうかい」娘はそう言って逃げて行きました。そうしたら中の娘が来て言いましたげな。それも、「エンコウの女房やなんかに、だれが行こうにゃあ」と逃げましたげな。そこで三番目の一番末の妹が行って言いました。「お父さんが言いんさることなら、どこへでも行きます」。おじいさんは、「おお、行ってくれ、すまんが」言って、起きてご飯を食べました。そしてその娘に、「何がええかい。要るものを買うてやる」と言います。

娘は針を千本買ってもらってエンコウの家へ行きましたげな。

行ってみますと向こうのお母さんには虱がいっぱいおります。それで娘はその虱を取っては、持って行った針に挿しし、一つ取っては針に挿しして、とうとう千本の針をみんな使ってしまいました。

そうするとエンコウのお母さんは、あんまり楽になったので、「兄いが出た留守だけえ、いんでくれえ、よう虱を取ってくれてありがたぁ。そいから、この箱をやるけえ、いんで悲しいときにゃあ、開けて見てくれ」と言って、その箱をくれ、また、猫の皮も娘にやりましたげな。「もし、息子がもどりよったら早う藪に入って、猫のふりをしてニャンニャン言っておれ」と言いました。

それから、帰って行く途中、向こうから息子が来たのですけれど、娘はもらった猫の皮をかぶって、藪へ飛び込んで、ニャンニャン鳴きました。息子は猫がいるかと思って、そのまま通り過ぎてしまいました。

帰ってみれば、姉さんたちは着物をたくさん広げて虫干ししております。それから、「悲しくなったときに開けてみなさい」ということだったからと、エンコウのお母さんの言葉を思い出して、箱を開けてみましたら、姉さんたちのよりもまだまだきれいな着物が、たくさんたくさんありましたげな。

やっぱり、親の言うことを聞く者でないとだめだということです。

### 解説

関敬吾『日本昔話大成』では、本格昔話の婚姻・衣類聟に該当する。筆者がこの研究を始めて最初に訪問させていただいたおり聴かせていただいた記念すべき話の一つである。コタツに当たりつつ、ネコもそばにいて、小学校低学年である孫の男の子二人も一緒だった。そのときのことがまるで昨日のように、わたしの頭には鮮明な印象で残っている。懐かしい限りである。

（元島根大学法文学部教授）